令和6年度「生徒による授業評価」報告書

神奈川県立総合教育センター

1 「生徒による授業評価」報告書について

○全県立高等学校及び中等教育学校（後期課程）における12月1日から1月15日までの「生徒による授業評価」の結果、「生徒による授業評価」に関わる取組及び授業改善に向けた取組などについて集計・分析した。

○令和6年度の「生徒による授業評価」の評価結果の回答総数は次のとおりである（第1表、第2表）。

第1表 共通教科回答総数

国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報	理数
155,258	87,455	45,898	115,725	114,518	140,553	44,186	151,119	39,121	32,802	3,932

第2表 専門教科回答総数

農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	理数	体育	音楽	美術	英語
5,242	16,392	4,164	841	2,028	525	548	5,129	0	2,645	1,050	1,527	0

○学習指導要領改訂に伴って質問項目を令和元年度から全面的に変更し、現在に至っている。（第3表）。

第3表 「生徒による授業評価」の質問項目（共通小項目）

大項目	共通小項目（標準例）		項目の趣旨
授業の在り方について	1	毎時間の授業や単元（内容のまとまり）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある	「主体的な学び」に関する項目
	2	単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある	「対話的な学び」に関する項目
	3	単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある	「深い学び」 に関する項目
学習の状況について	4	授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた	「項目1」と関連の深い項目
	5	他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた	「項目2」と関連の深い項目
	6	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた	「項目3」と関連の深い項目
	7	授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた	より高次な学びの構築に関する項目

○学校で取り組んでいる研究の成果指標として活用したり、生徒の実態に即した項目を設定したりするため、7項目の共通小項目に加えて、さらに学校独自の小項目を設定することができる。各学校で独自の小項目を設定する際の参考のために、学校独自の小項目の例を次のとおり示した。

●授業の中で、端末を活用し、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。
●この授業において（またはこの授業をきっかけとして）、実社会につながる課題について考えたことがある。
●教科の学びにおいて「観察力」（各教科「教科として高めようとしている「観察力」の例」を記入）が身についたと感じる
●教科の学びにおいて「分析力」（各教科「教科として高めようとしている「分析力」の例」を記入）が身についたと感じる
●教科の学びにおいて「発信力」（他の意見を知り、自分の意見をまとめ、他に伝わるように表現する力）が身についたと感じる
●授業を通じて、教科への興味や関心が高まり、調べてみたり、深めてみたいという気持ちが強まった（学習意欲の向上）。

2 集計・分析の結果

(1) 共通教科・専門教科の集計結果について

○各教科及び全体について、肯定的な回答（評価「4 かなり当てはまる」又は「3 ほぼ当てはまる」）をした割合を、共通小項目ごとに示した。第4表は共通教科、第5表は専門教科の集計結果である。

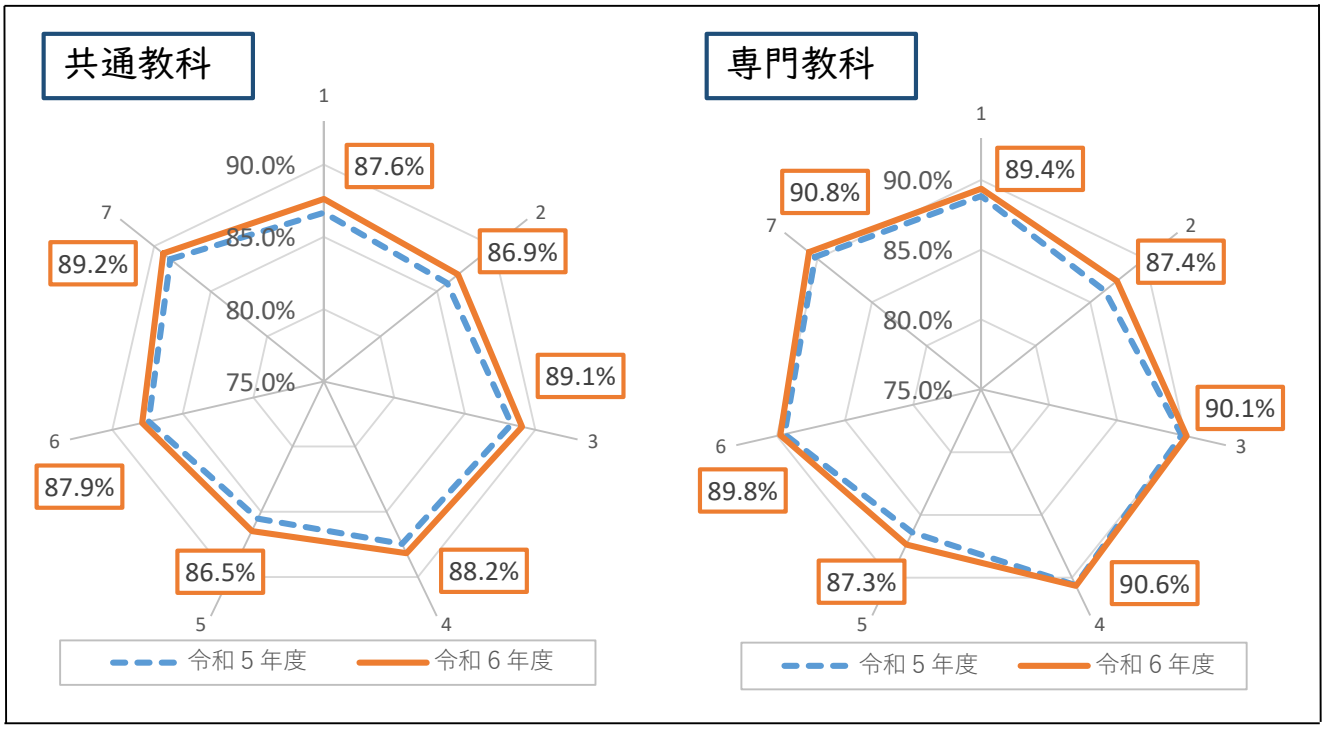
第4表 共通教科の集計結果 （単位は%、小数第2位を四捨五入）

共通小項目	国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報	理数	平均
1	87.3%	88.5%	88.8%	86.7%	85.5%	89.1%	88.8%	88.0%	88.8%	85.3%	83.5%	87.6%
2	89.0%	86.5%	88.9%	84.8%	83.6%	87.1%	86.3%	89.1%	87.4%	82.4%	87.5%	86.9%
3	89.7%	88.4%	89.8%	89.2%	87.3%	89.9%	89.3%	89.3%	89.4%	87.0%	88.8%	89.1%
4	86.8%	86.5%	87.2%	88.9%	86.0%	90.6%	91.1%	88.7%	89.6%	87.4%	84.7%	88.2%
5	88.4%	86.6%	89.0%	84.5%	83.2%	87.3%	86.8%	87.4%	87.5%	82.9%	86.1%	86.5%
6	87.9%	87.8%	88.7%	88.0%	86.3%	89.5%	88.5%	87.2%	88.8%	86.4%	88.2%	87.9%
7	88.2%	90.3%	90.2%	89.0%	88.0%	90.0%	89.4%	89.9%	90.2%	86.8%	87.3%	89.2%

第5表 専門教科の集計結果 （単位は%、小数第2位を四捨五入）

共通小項目	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	体育	音楽	美術	平均
1	86.2%	88.2%	86.7%	94.1%	92.0%	98.7%	87.4%	91.7%	96.2%	93.8%	89.9%	89.4%
2	82.7%	86.3%	84.0%	93.6%	91.6%	98.9%	83.6%	90.1%	96.1%	91.0%	88.1%	87.4%
3	87.8%	88.5%	88.5%	95.2%	92.3%	99.2%	88.7%	92.1%	95.8%	94.7%	92.3%	90.1%
4	89.7%	88.7%	89.6%	96.2%	94.5%	98.8%	89.7%	90.8%	96.6%	95.7%	92.3%	90.6%
5	84.4%	85.6%	83.9%	91.2%	91.2%	98.6%	82.8%	89.8%	96.1%	91.3%	90.6%	87.3%
6	88.1%	88.4%	88.8%	93.9%	92.4%	98.8%	89.8%	91.1%	92.4%	94.8%	91.7%	89.8%
7	89.2%	89.0%	89.7%	95.6%	93.4%	98.8%	89.7%	91.1%	96.7%	96.1%	93.8%	90.8%

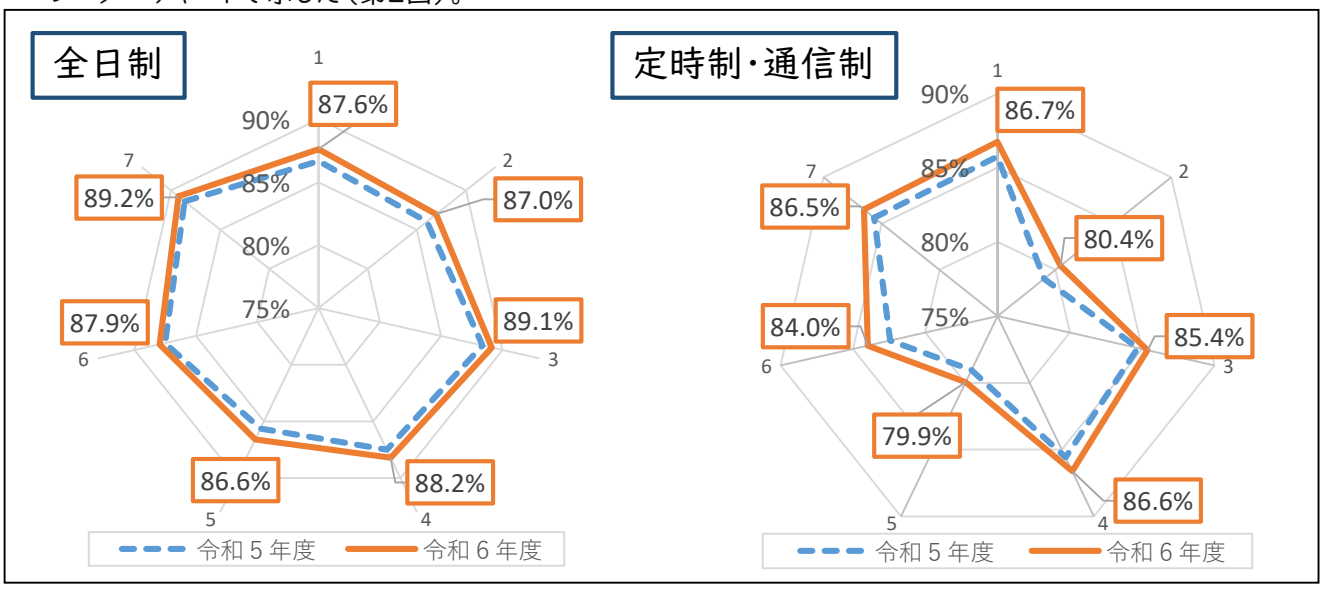
○共通教科及び専門教科全体について、肯定的な回答をした割合を、共通小項目ごとにレーダーチャートで示した（第1図）。



第1図 共通教科及び専門教科全体において、肯定的な回答をした割合

⑵ 全日制課程及び定時制・通信制課程について

○全日制課程と定時制・通信制課程の共通教科全体において、肯定的な回答をした割合を、共通小項目ごとにレーダーチャートで示した（第2図）。



第2図 共通教科全体（課程別）において、肯定的な回答をした割合

○令和6年度は、共通教科・専門教科ともにすべての共通小項目で、肯定的な回答をした割合が2年連続で昨年度を上回った。学習指導要領改訂に伴って、令和元年度から質問項目を全面的に変更して以来、令和4年度を除き、一貫して上昇傾向にある。各学校が「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて組織的な授業改善を進めてきた結果が、生徒からの評価にも表れていると考えられる。

○共通教科における「対話的な学び」に関する共通小項目2と、その関連の深い項目である共通小項目5は、他の項目と比較して毎年少し低い傾向が見られるが、令和元年度から経年での伸び率の視点で見ると5%を超えており、項目中では最も高くなっている。他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会を、この5年間で教師が積極的に作ってきた結果であり、各学校の取組に一定の成果があったと考えられる。一方で、定時制・通信制の課程における共通小項目2と5は、令和元年度から経年で見ても、80%前後の数値で変化が少ない状況が続いている。多様な環境にある生徒たちにとって必要な学びは多岐にわたり、全日制とは異なる課題がある等さまざまな要因があると推察する。その中で「対話的な学び」を実現するには困難もあるが、学校教育目標と照らし合わせながら、生徒にどのような資質・能力を身に付けさせたいかを踏まえた授業改善を継続し、「指導と評価の一体化」が図れるよう取組を進めてほしい。

○全体として、共通小項目の肯定的回答の割合が90%に近付きつつある現在では、肯定的な回答のうち、「4 かなり当てはまる」に焦点化して分析することで、より精度の高い視点で授業での取組を見取ることも考えられる。そのためには、「単元で身に付ける力」について日々の指導の中で生徒に理解させながら、「生徒による授業評価」のねらいが生徒に着実に伝わることが重要である。

○また、各学校において、生徒に目指す力が身に付いたか達成状況を検証することも肝要である。共通小項目1～3の項目は、授業でそのような機会が設けられていたかという教師側の取組を問うものであるのに対し、4～7はその取組を受けて生徒が身に付いた力を実感できているかどうか問うものである。共通小項目4～7を最大限に生かすためには、数値から見取るだけではなく、生徒一人ひとりに自らの学習をメタ認知させ、具体的に記述させることで、その成果を見取っていきたい。学校独自の小項目等を活用し、教師は授業で身に付けさせたい力を設定し、その達成状況を見取りながら、「指導と評価の一体化」を進めていってほしい。

3 「生徒による授業評価」に関わる取組、授業改善に向けた取組など

(1) 「生徒による授業評価」の活用

「生徒による授業評価」をどのようにいかしているかについて、各学校から次のような回答があった。

○8月に授業改善に関わる研修会を実施し、授業評価の結果から各教科で力を入れて取り組むべきことは何かを話し合い、日々の授業に生かしている。またそれらの成果を、11月に行った公開研究授業を組み立てる際の足がかりとしても活用した。

○前期の授業評価の結果を教科会議にて分析・討議し、後期は「探究的な学び」や「言語活動の充実」を意識した授業改善に生かした。またそれらの内容を踏まえつつ、組織的な授業づくりと公開研究授業を行った。その後、後期の授業評価の結果を踏まえて、次年度の「単元の指導と評価の計画」の見直しを行った。

○項目6において、最高評価の4を回答した生徒が50%以上いるかを確認した上で、9月上旬に教科会を開催し、授業改善に向けた協議及び情報共有を行い、結果を職員会議で報告した。

(2) 「生徒による授業評価」に関する課題やその解決方法

「生徒による授業評価」に関する課題やその解決方法について、各学校から次のような回答があった。

○教師が生徒からのフィードバックをどのように授業に反映させるかのプロセスが不透明な場合、生徒は授業評価への意欲を失いやすい。(これに対して)「前回の授業で○○の点について改善した」と明示的に伝えることで、評価結果が実際に反映されていることを生徒が実感できると考えている。

○Google Classroomや共有ドライブが普及し、協働学習や課題解決型の授業の実施状況は生徒に質問しなくても把握できるようになった。これらは日常的な課題提出などで把握し、授業改善に役立てている。質問紙法の評価は生徒の意識が反映されやすく、資質・能力を育む授業改善に役立てづらいことが課題である。

○同時期に多くの教科・科目で評価を行うため、生徒に負担がかかっている。時期をずらすなどの工夫をして、生徒が落ち着いて丁寧に回答できる状況を確保したい。

(3) 「生徒による授業評価」以外の授業改善に関する取組

「生徒による授業評価」以外の授業改善に関する取組について、各学校から次のような回答があった。

○個別最適な学習と協働的な学びについて、またICTの活用についてそれぞれ研修を行った。その後、各教科で有効な手法について協議する場を設け、教科を超えてアイディアを共有し、実践を行い、互いに授業見学をして、それぞれにフィードバックを行った。

○教科ごとに「すべての生徒の分かりやすさに配慮」することを基にした研究テーマを設定し、そのテーマを基に授業実践を行い、前期、後期の年2回の授業見学・研究協議を行った。

○年5回の授業改善研修を計画し、「指導と評価の一体化」や「探究的な学び」等をテーマに研修を実施した。

○期間を決めて近隣の中学校の授業見学させてもらっている。中学校の授業を見て現状を知り、情報交換をすることで、高校入学後の生徒のつまづきやすい部分を把握して、授業に生かすことができている。

○授業評価とは別に、「生徒による学習の自己評価」を実施し、生徒がどのような思いでどの教科に力を入れて取り組んだのかを把握している。

4 「生徒による授業評価」のよりよい活用のために

○2年連続で肯定的回答が前年度を上回ったことから、各学校の取組に、より改善がなされたことがうかがえる。集計結果の数値が全体的に高くなった現在、その数値だけでは測れない生徒の具体的な学習状況を教師一人ひとりが丁寧に見取り、その上で生徒の資質・能力が向上したか、学校目標が目指す姿に近づいたかを振り返って、授業改善に生かしていく必要がある。

○各学校の特色を生かして、教師が子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての役割を担いつつ、学校全体での組織的な授業改善につなげられるよう「生徒による授業評価」を活用していただければ幸いである。